

生鮮DXの現状紹介

パーソナル情報システム まずはERP導入を

「生鮮流通フォーラム」2日目

生鮮業界向けの「デジタルトランスフォーメーション(DX)IIITを用いた変革」についてのセミナーが8月28日、パーソナル情報システム(株)主催のオンライン配信「生鮮流通フォーラム」の2日目に行われた。主催社による生鮮業界においてのDXの現状、課題の分析に加え、コンサルティング企業による実際の導入までの流れなどを紹介

した。

現在、さまざまな業界で人工知能(AI)やビジネス分析ツール(BI)などによるDXが起こっている。効率的な業務や高度な分析が行われている中、生鮮業界は後れを取っており、情報の統合や分析が活発に行われていない。

同社の金子剛ERP部長は生鮮業界でDXが進まない背景として手書きの作業が多いことに加え、デジタル化が進んで

いても「古いシステム(レガシーシステム)の多さも(統合した解析やさらなる効率化の)足かせとなっている」と解説。DXの導入には統一された企業の基幹となるシステム(ERP)が必要だとを訴えた。

具体的にはERPの導入についてはコンサルティング会社、スカイライトコンサルティング(株)の井川朋久シニアマネージャが紹介。すぐに導入が可能なのだけでなく、通常1〜2年の期間が必要なことや組織の課題のくみ取り方、ERPで効率化できるのかなど詳細に解説した。

野の仕事を一元管理するため決算の効率化という面が注目されがちだが同氏は「最強のBIツールになり得る」と主張。さまざまなデータが可視化

されれば、意思決定の幅が広がるほか、定量的な分析につながると解説した。